

「(仮称) 町田市都市づくりのマスタープラン」策定に関する特別委員会 第4回 議事概要

1. 開催日時 2020年9月18日(金)午後6時00分～午後8時20分
2. 開催場所 町田市庁舎3階3-1会議室 及び リモート会議(webex)
3. 出席者

<委員>

野澤 康委員長、市古 太郎副委員長※、中西 正彦委員、村山 顕人委員※、岡村 敏之委員※、
薬袋 奈美子委員※、寺田 徹委員※、高橋 清人委員、杉井 学治委員、名取 浩介委員、
前田 智也委員、新倉 敏和委員、森山 健司委員、西村 靖生委員、山田 勉委員、露木 輝久委員
※リモート出席(webex)

<事務局>

都市づくり部長、都市整備担当部長、都市政策課長、多摩都市モノレール推進室長、
交通事業推進課長、地区街づくり課長、住宅課長、公園緑地課長、公園管理担当課長、他各課担当

4. 傍聴者 なし
5. 次第

- (1) 市からの論点説明
- (2) 委員からの話題提供
- (3) 議論

6. 議事内容

(1). 市からの論点説明(資料1・2)

<エリア類型④「農やみどりとの関わりを大切にした暮らし」基本認識(資料1)、エリア類型④「農やみどりとの関わりを大切にした暮らし」の暮らしのイメージと論点資料(資料2-1)について事務局より説明>

(新倉委員)

- ・資料2-2のp8に掲載されているが、町田市農業協同組合ではクックパットとの連携を行い、スマートフォンアプリを使って販売をするアプリを展開している。JA横浜が全国初出店しているが、行政との関わりは全国初であり、東京都では町田市が全国初出店である。これまで課題であった若年層へのアプローチや午前中の買い物ができない人へのアプローチが可能になった。生産者にも販路の拡大により意欲の向上が期待されている。コロナ禍での新しい生活様式においても外出を控えながら購買の機会を創出できる。昨日から運用開始している。

(村山委員)

- ・地域に暮らす人について、この地域の人口の増減や維持についてはどう考えていくのか。新しいライフスタイルによるニーズがあると思うが、そういう人を受け入れていく考えもあるのか。

(事務局)

- ・昨年、市街化調整区域における地区計画の運用方針をまとめた。市街化調整区域ではあるが、この地域に住む人が引き続き住めるような環境づくりや、さらに、緑の環境を求めて居住したい人も一定程度混ぜ込みながら地区の継続を図っていくことは運用方針の中でも謳っており、その方向で考えてい

る。大規模開発を行うわけではない。

- ・地区計画の運用方針を作った段階であり、実際に地区計画をかけているわけではない。現在、3つのエリアで地区住民が話し合っている段階であり、市側の方針を示したところである。

(2). 委員からの話題提供

●葉袋委員「町田市民の生活を豊かにする緑の活用案」

(葉袋委員)

- ・フットパスは民地を積極的に歩く仕組みとしてイギリスで発達しており、町田市でもそれを真似した形で市民活動から出発し、市でも応援されている。それを維持発展させていくことが良いのではないかと。
- ・町田市では、小野路で最初に始まった。単に歩くことを推奨しているだけでなく、地主さんに理解をいただくコミュニケーションをしているかがポイントである。地主も最初からウェルカムというわけではなく、市民レベルで外からきてもらうことの良さを伝え、女性が活躍する場としても活用し、農家の女性の方を通して声をかけ、地域の歴史的なことに詳しい人にも働きかけをしていった。
- ・北部丘陵では、個人が庭の延長的な感覚で緑に触れられるようになると良い。現在は、多摩ニュータウンの住民の方に使われているのではないかと残念に思う部分がある。黒川にある直売所には、多摩ニュータウンの人が買いにきているようである。地域の人がより活用できるようにしていくことも大事ではないか。
- ・市民農園や貸し農園の形もあるのではないかと。うまくマッチングして、多くの人に使ってもらえるように、いろいろなタイプの農園ができると良いのではないかと。自治体やJAだけでなく、民間企業も参画するようになると良いのではないかと。

(寺田委員)

- ・町田市のフットパスの事例について、2008年以降の活動がどうなっているか。

(葉袋委員)

- ・フットパスの紹介については町田市がお金を出しているが、その後新しいことをしているとは聞いていない。全国に広める方向に取り組んでいる。

(寺田委員)

- ・現在はもう地主さんからの反発などは起きていないか。

(葉袋委員)

- ・地主が変わって、通れる場所も変わってきていると聞く。

(寺田委員)

- ・先日、現地を訪れたらマウンテンバイクを多く見たが、マウンテンバイクは認めているのか。

(葉袋委員)

- ・認めていないと思う。そういうことがあると、地主の考えも変わってくるかもしれない。外の人にきてもらうだけでなく、来る人のマナーも含めて、総合的に考えていく必要がある。

(事務局)

- ・日本フットパス協会の会長に町田市長がなっている。市内のフットパスは北部丘陵を中心に始まり、現在市内で22箇所指定されている。本検討の中でもうまく入れ込めないか考えている。緑を使って健康になるツールの一つとしても考えている。
- ・ガイドブックは、2種類出ており、2011年度が最新である。

(森山委員)

- ・町田市観光コンベンション協会では、フットパス協会の事務局も受けており、昨年度は10周年ということで、全国から町田市に来てもらってコースを回ってもらった。当協会でも、町田市全体のマップを発行しておりその中でも一部のコースを紹介し、案内している。

●村山委員「藤巻さと構想と地域まちづくり（参考事例）」

(村山委員)

- ・1つ前の世代の名古屋市の都市マスタープランでは、地域まちづくりの推進とサポート制度の導入を盛り込んだ。名古屋市では行政区画が広く人口が多いため、きめ細かな地域別構想を作れず、行政が戦略的に推進する地域と、それ以外の地域の住民等が主導して行政がサポートするところがある。藤巻は地域が主導するまちづくりの事例の1つである。
- ・藤巻町は、都市計画公園に位置づけられている地域であり、事業着手3期で2037年までに公園の整備に着手するとなっているが、実際は予算も削られており、公園整備事業の開始は100年後ではないかと言われている。約200世帯が住んでいるが、都市計画公園区域なので、道路の本格的な舗装や下水道などの基盤整備ができない地域である。
- ・住み続けたい人と、早く土地を買って欲しい人と様々な人がいたが、大学の研究室でサポートし、地域の要望として取りまとめ、行政に提出をした。住み続けるエリアと樹林地エリアとを分けて、最終的には一部地域を都市計画公園区域から除外することを目指した要望である。緑地の種類に応じて、緑を育てていくという点で参考になるのではないかと。また、地域の人が住みながら緑を維持管理していくスキームになっている。

(市古副委員長)

- ・7枚目にあった「長期ビジョン」のゾーン区分は、宅地利用の実態や居住者の意向をベースとされたと同時に、右ページの「緑地植生評価」および「生物多様性」評価が大事な材料になったのではないかと。
- ・本検討会への論点として、基礎資料にある「森林・農用地」区分についての森林視点から、また、農用地の生産力としての調査が必要となってくるのではないかと。

●中西委員「自然環境の多主体による共同利活用のハードル」

(中西委員)

- ・今回、エリア類型3に近い内容かもしれないが、体験的に感じていることを話したい。
- ・大田区千束地区は、地域の方の思い入れも強い地域であり、地域の方に地域の良い場所を聞くと、緑豊かな場所が挙げられる地域である。風致地区がかかっていることや、町会が様々にあるため、事前連携も必要になっており、緑は人々がわかりやすく意識共有できる地域資源になっている。
- ・横浜市金沢区の金沢緑地は、10メートルくらい土を盛った人口的な緑地である。産業地区と住宅団地の境界に位置し、産業地側では煙に強い樹種など、多様な樹種が植えられている。最近、産業地区と住宅団地のそれぞれから、緑地の活用を考えられないかという動きが出てきている。緑地自体に存在感があり、地域の方が日常の中で歩いたりしていたからこそその動きだが、緑には多様な主体が相乗りできる可能性がある。
- ・エリア類型4でみどりを利活用するために、象徴的なみどりの存在が重要である。「(固有名詞がある)〇〇山、〇〇緑地が身近にあり、そこで〇〇ができる暮らし」など、具体的な活動を書き込んで行く

ことが大事ではないか。このマスタープランなのか、この下にぶら下がるプランなのかもしれないが。

- ・そこに住んでいる地域住民がアクセスできるようにすることが大事である。今回話題にあがったフットパスも良いのではないか。
- ・管理を限定的な市民や民間に委ねるのではなく、アイデアの発案段階からオープンに市民や民間に関わってもらうことが大事ではないか。特に、公共が持っているみどりだと管理責任やお金の問題がすぐに出てくるので、柔軟な管理が難しくなる傾向があり、エリアマネジメント的な発想を持った柔軟な管理ができると良い。

(市古副委員長)

- ・1枚目でいうコミュニティとは、どういう組織を想定しているのか。多様性があることが大事だとは思いますが、町田の特徴にフィードバックできる自然環境のコミュニティのイメージがあるか。

(中西委員)

- ・自然環境の利用実態としては、まずは所有者や地権者の意向があり、次に愛着がありよく利用している方々にある意味独占的に利用されているのではないか。ここでは、もう少し幅広く、周辺住民や民間も含めた主体として、コミュニティという言葉を使った。多くの多様な主体という意味で捉えて欲しい。

●寺田委員「近郊里山の保全と利用」

(寺田委員)

- ・これだけまとまった近郊緑地を持った自治体はないと思う。一方、資源の有効活用が進まず衰退している部分もある。社会面としては、昨今のデジタル化が進んでいく中で、触れられる緑としてフィジカル環境の重要性が再認識されている状況だと思う。改めて、アフターコロナを踏まえると、フィジカルな環境は維持しなくてはならないし、モノレール延伸を契機として里山地域の再生・活用の機運があると思う。
- ・資料では、市街地住民の暮らしへの活用の視点多いが、それだけでなく、産業の視点や、河川の源流地となっているので環境保全の視点も必要と考え、「生活・暮らし」「産業」「環境・生態系保全」の3つの視点を提示したい。
- ・「生活・暮らし」の視点としては、生活の拠点は都市部、週末は里山でというような市内の二地域居住も可能な地理的環境にある。
- ・週末にみどりに触れてもらう段階から、定住してもらう段階があるとすると、その真ん中の部分の話をしたい。クラインガルテンのような週末一泊できる程度の小屋を整備することで、町田市内での「里山関係人口」を増やすことが具体例としてあるのではないか。
- ・また、モノレールが延伸してくることで、町田市内の人々が週末使うようになることも十分あるのではないか。さらに、テレワーク時の里山サテライトオフィスとして活用や、農業体験参加、地元農産物購入、援農ボランティアなどによる地元農業支援といった町田市版コミュニティサポートアグリメイトということもありうるのではないか。今後、市内でも人口の粗密がついてくると思うが、里山関係人口増加という視点があっても良いのではないか。こういう状態が実現することで、健康にどれだけ寄与するかということも測定することもあるのではないか。
- ・「産業」の視点としては、農業以外の産業について話そうと思う。産業を考えると、農業だけの活性化は難しく、観光という視点も考えていかないといけない。そのためには、民間の活力がないと難しいと思うが、Park-PFI の概念を里山地域に拡張し、町田市の土地での里山 PFI ということもできる

ポテンシャルを持っている地域だと思う。

- ・樹林地管理について最近の話題提供をしたい。ナラ枯れが去年から広がり始め、被害が拡大している。主に薪炭として使っていた樹木が管理しきれず高齢化し、ナラ枯れの被害にあっている。早く切って更新を促していくことが重要であり、バイオマスと組み合わせて循環型エネルギー供給圏を構築していくことも必要ではないか。エリア類型4に関しては、樹林地を適切に管理しながら、エネルギーを得るバイオマスがこの地域には適していると思う。
- ・「環境・生態系保全」の視点からは、モノレールはダメージを与えることにはなるが、開発するところと保全するところのゾーニングが重要である。
- ・里山保全にかかる市民団体で、NPO こびすくらぶ（千葉県船橋市）を紹介したい。賃金を貰いながら週2回、里山の管理をしている。実働40人くらいで102ヘクタールを管理しており、プロに近い内容の管理をしている。積極的な管理ができているのは、森林計画を使って地権者とつながり、お互いにWin-winの関係になっているからである。NPOは地権者から森林計画を使って委託を受ける形にしており、都市計画では、保全までしかできないが、森林計画を使って管理もできるようにしている。
- ・森林管理は本来所有者が行うものだが、2001年の改定によって委託でも相続税の減免が得られるようになっており、地権者にとってもメリットがある。
- ・管理能力は森林組合と市民ボランティアの間くらいのセミプロレベルであり、参加者は労働と余暇の中間から、どちらかと言ったら労働寄りの価値観を持っており、これまでのボランティアとは違った価値観を持っている。
- ・こうした生活、産業、環境保全の部局間連携により、「ちょうど良い」が生まれてくると思う。ヒト・モノ・カネを循環させるという農村の地域再生の手法ではあるが、この地域に当てはめることもあると思う。

(市古副委員長)

- ・町田市の都市づくりへのフィードバックの視点として5枚目の「環境アセスメントゾーニング」をよいカタチで進めていくための制度や手法には、どんなものがあるか。もしくは「都市計画基礎調査」に少し付け加えることで、手が伸ばせられうる内容はあるのか。

(寺田委員)

- ・都市計画基礎調査では、農地や樹林地についてはあまり詳しい類型がされていないので、例えば、樹林地については環境省の「現存植生図」、農地については「土壌図」「筆ポリゴン」「農業データ連携基盤」などの別部局のデータと連携すれば、市街化調整区域のもう少し詳しい資源評価が可能かと思う。それを都市計画の枠でやるのか、緑分野でやるのかはあるが、別々にやったとしても連動すべきだと思う。

(3). 議論

エリア類型4「農やみどりとの関わりを大切にした暮らし」の暮らしのイメージについて

(山田委員)

- ・里山という言葉は、幻想的な良いイメージを引き出してしまいうので、個人的には好きではない。北部の緑地は多摩市に隣接しており、ここに行こうとすると多摩市民の方がアプローチしやすい。町田市街地に住んでいる人がここにアプローチしようとする、という手段でより行きやすくしてあげるかが重要ではないか。モノレールも一つ的手段としてはあるが、それ以外の小さい交通手段でのアプローチも考えた方が良いのではないか。現状ではどうしても自家用車でアプローチしてしまう場所で

あり、自家用車以外の方法を提示することで、町田市の人がアプローチしやすくなると良い。

- ・緑を活用することには賛成である。サテライトオフィスを緑のそばに置くことで、経済的にお金を生み出し、緑の保全に活用することも良いと思う。ただし、やはりそこへのアプローチ手段をどうするか問題である。

(中西委員)

- ・市内での二地域居住は面白いが、難しい部分もあると思う。里山での働く場所を作るということも良いと思う。暮らし方の多様性を生む手段として良い。それをどう実現するかが大事である。同じ町田市内だが、市街地とはガラッと環境が変わるようなことも大事ではないか。大胆な市街地と里山部の環境の違いを作ってブランディングすることも必要ではないか。

(名取委員)

- ・この地区を散策したことがあるが、その時に自然薯や竹の子、栗畑に出会い、タイムスリップしたような感覚を覚えた。一方、土地利用の制約を考えると、大部分は市街化調整区域などで利用や譲渡の制限があり、その中でやる必要がある。多様な事例もあるので工夫していくことも大事だと思った。
- ・貴重な資源であり、学校や地域の連携に使えることが理想ではないか。また、用地管理などにおいてNPOを活用するなどの事例もあるとのこと、勉強になった。
- ・URとしては、自治会の活動の中でこういった緑を使った活動ができないか、今後の研究課題だと思っている。

(葉袋委員)

- ・北部丘陵は、かなり傾斜地もあり、今回紹介されたような農地的な利用(クラインガルテン等)や、気軽に歩きやすいフットパスとして利用できるようにするには、厳しい地形もある。十分な現状の確認と柔軟な方法の提案が必要だと思う。
- ・また、今後、空き家・空き地が発生した場合に、農的利用ができる空間にするための、制度面の応援が必要ではないか。例えば、貸農園にしたら宅地並み課税でなくなるなども考えられないか。

(高橋委員)

- ・市の資料の事例は、類型4の地域をいかに地域外の人が利用するかということが中心になっている。私はこの地域の端っこに住んでいるが、市街化調整区域にお住まいの方々はいろいろな不満や要望を持っており、まちづくりをする時にはそこに住んでいる人がどういうことを望んでいるのか、地域の中はどのような形にまとめるのが良いのかというプロセスがないと、外部からきて利用し、地元には多少のメリットがあるという形で終わってしまうのではないか。様々な事例があるが、地権者やそこに住んでいる人に大きなメリットがあるというものは少ない。住んでいる人のメリットも考えて計画を作らないと進まないのではないか。

(事務局)

- ・地元にとってのメリットを考えずに、緑を都市側の人間が消費しにくる場ということだけでは、本末転倒だと考えている。都市側の人間も含めて、みんなが関わることで、地元の方を支援していくことに繋がっていかないと意味がないので、その点は抜け落とさないで考えていきたい。
- ・地元の人がどう考えているかは、今まさに、まちづくり協議会が立ち上がり検討をはじめているので、その想いを汲みながら、町田市の想いを混ぜ込ませて、計画の方向づけをしていきたい。

(中西委員)

- ・今年度は暮らしのイメージの話が中心だが、土地利用についてもイメージをしておきたく発言をしたい。エリア類型4は市街地調整区域であり土地利用の規制が厳しい地域であり、その規制をどうして

いくかという検討は不可避である。人口の動態もあるので一概には言いづらいが、何かを実現しようと思えば何らかの開発行為は伴ってくるので、それを可能とするような規制の柔軟な運用も求められると思う。また、今後の人口減少など、開発圧力が薄まる時代において、開発を誘発するように規制を外すこともあるだろう。一方、無制限に外してこの地域の価値が毀損されることがあってはならない。ベースは厳しくして、条件や基準によってそれを緩和するようなインセンティブの仕組みになるのではないか。それが結果として、高橋委員のおっしゃった地域の不満に対応することでもあると思う。

- ・現在、改定している町田市住みよい街づくり条例でもその辺りをオーソライズする仕組みをここでこそ適応するなど、市街化調整区域の地区計画を適用するようなプロセス設計をこの都市づくりマスタープランを作っている間に具体化する必要もあると思う。現段階では、メリハリの効いた、抑制的だが柔軟に運用ができる仕組みが重要になってくると思うし、それが今後の重要なテーマになってくると思う。

(岡村委員)

- ・この地域の中で新しい小さな交通を実験的にやるのは楽しい場所だと思う。一方、やって来る人の密度を考える時に、公共交通が成り立つエリアではないだろう。バスマップを見てみると、現在、バスはある。農業をやる人がバスに乗るのかということはあるが、公共交通に関してそれほど新しいことは考えなくて良いのではないか。モノレールに関しては、それを前提にしてということしか言えないと思う。新しい仕組みを入れる場所ではないというところが率直なところである。

(葉袋委員)

- ・マストランジットが充実して、非常に多くの人が集まることは、慎重に検討すべきエリアであり、岡村先生と同意見。特に緑地は、地形の保護、生物の保護の観点からも、一般的に、人がたくさん来ればいいとは限らないと思う。

(杉井委員)

- ・今後、身近な地域の中で食を賄えることも大事であり、クックパッドも地産地消という観点で良いことだと思う。より一層、もっと美味しく食べられるためにはどうすれば良いか、生産に関わるためにはどうすれば良いかが加わると、なお良いのではないか。食と農がつながって循環してくるような仕組みになると、フードロスの解決につながるのではないか。
- ・今後、マイクロツーリズムのようなニーズが高まるとしたら、日帰りで行ける場所、寛ぐ場所としてこういった場所が使われると良いのではないか。大人も遊べる冒険遊び場などもあるのではないか。
- ・こびすくらの仕組みは大事だと思う。こういう取組を通じて仕事が生まれることが一つのメリットになるのではないか。セミプロや、労働と余暇の間という絶妙なところをついているが、リタイアした人がこういった場所で仕事をすることで、新たな生きがいにつながると良いのではないか。

(市古副委員長)

- ・緑のマスタープランと環境のマスタープラン、都市計画マスタープランのインタラクションと、都市づくりのマスタープランの固有性についてはどのような方針か。

(事務局)

- ・都市づくりのマスタープランの中に、緑の部分が入ってくるので、そこの柱建て、暮らし方の中で緑の分野がどういう取組をしていくかは、本委員会での議論になる。環境マスタープランは並行して検討が始まったところで、これから計画間ですり合わせをしていきたい。

(市古副委員長)

- ・その部分を市民、議会、都市計画審議会に対して、わかりやすく明確に示していく工夫も重要だと

思う。

(野澤委員長)

- ・資料にはもっと、地権者と調整すべき話をシビアに書かなくてはいけないのではないかと危惧した。そうでないと、20年後の夢物語に過ぎないマスタープランになってしまうのではないかと危惧した。いろいろなアイデアが出てくるのは良いが、地主が協力しないとできないものも沢山あるので、片手落ちの計画になりかねない。そのあたりは詰めていけると良いと思う。

(葉袋委員)

- ・北部丘陵地域は、災害面での備えも十分に考えなくてはいけないことが多いと思う。

中間とりまとめに向けた市全体の暮らしのイメージについて

(野澤委員長)

- ・暮らしのイメージを議論してきたが、多様な暮らしが市内でできるということはアピールポイントとしてあるだろう。市内二拠点居住という面白いキーワードも出てきたが、必ずしも市内で完結しなくても良いのではないかと。いわゆる関係人口を増やすということもあるのかなと思う。そういった多様な魅力のあるまち、多様な暮らしができるまちということはどこかに入れられれば良いと思う。

(中西委員)

- ・連担した首都圏の市街地のなかにあるので、周辺市との繋がりをしっかり描くことも必要ではないか。外との繋がりも重要であり、そういうものを作っていきたいという図になっていくと良い。市外からの人ももっと利用しているような図になると良い。

(西村委員)

- ・クライנגルテンは大きな投資を伴うので難しい部分もあり、今は農泊だという声も聞く。市街化調整区域をどうしていくか、お金をかけずに魅力を維持、向上させるためには、やはり関係人口に着目すべきで、そういう人をいつでも受け入れる形にするという表現をしてほしい。実際に、北部丘陵に市南部の人を取り込むのは難しい。

(葉袋委員)

- ・周辺の自治体との連携、関係人口を増やし、町田の魅力的な部分を利用していただくことが大事という意見に賛同する。あとは自治体ごとの特徴を意識し、自分の住む町への愛着心を育むことも意識して、町田の魅力的な部分を、市民自身に意識していただくことが大事かと思う。

(村山委員)

- ・資料のイメージ図を参考にするのは良いが、重要な要素として記載されている内容を見ると、ランドスケープの観点が弱いのではないかと。暮らしのイメージから入っているので、保全すべき緑のところにも人が入っていく内容が多いが、まずは環境・緑の基本計画の観点から、保全すべき場所はもう少し強調し、人が入るべきではないところもしっかり示していくべきではないか。

(寺田委員)

- ・2040年時点の暮らしのイメージということだが、これまでに議論してきた内容はすぐに実現できそうなものから、20年くらいかかるといふようなものもあった。これまで、時間軸の検討はしていないが、第1段階でできること、第2段階、第3段階で社会や地権者が変わることによってできることというように、段階的に変わっていくイメージを表現しておくと良いと思った。中間まとめまでに確実にやってほしいという意味ではないが、最終的に整理する時には、段階的な整備に関する議論をできるとよい。

(事務局)

- ・20年間という長いレンジを置いているので、どういう順番で取り組んでいくかというおおまかなロードマップを見せていくことが最終的には必要と考えている。中間時点ではその考え方を示し、最終までに議論をしたい。

(杉井委員)

- ・A3の下にある3つの枠について、「出歩きたくなる移動」とは目的があるかどうかが重要である。また、オープンスペースができるとアクティビティが生まれるわけでもない。
- ・多様な暮らしがあることが重要であり、その要素が何かをブレイクダウンしていくのが重要と思う。
- ・そのためにも、「ちょうど良いがどういうことかを表現すると良い」ではないか。

(野澤委員長)

- ・「移動がしやすいから出歩きたくなるわけではなく、目的や快適性を求めて出歩きたくなるのではないか」と思う。 こちらの表現は考えた方がよい。

(岡村委員)

- ・「いろんなアクティビティが、家の近くでできることで、思わず出歩きたくなるのであって、交通はその下位にあり、上位の中身が重要。」「気軽にアクセスでき」という表現ではないかもしれない。

(市古副委員長)

- ・全体ビジョン編を作っていくとのことだが、「ビジョン」と、「暮らしのイメージ」がどのように関係づけられているのか整理してほしい。「方向性」という表現もあるので、イコールではないとしたらどういう位置づけなのか。全体ビジョンはもう1枚絵が出てくるのか、次回でよいのでご示唆頂きたい。

(薬袋委員)

- ・「暮らしのイメージ」だが、場の多様なオープンスペースというものの中に道空間も入れてほしい。道も柔軟に使われると良いという話があったかと思う。
- ・「思わず出歩きたくなるための移動のしやすさとは」を、「出かける気持ちを支え、誰もが行きたい場所に行きやすい交通網とは」としてはどうか。交通網という言葉は改善の余地があると思う。

(中西委員)

- ・下の3つの枠について、左の2つは手段と目的が逆だと思う。また、若い人が便利な場所に住んでもらおうと思うと、アフォーダブルな住宅を利便性の高いところに供給することになる。
- ・「古い都市計画は用途純化を進めてきたが、今後はそれを用途混在につなげていくということであり、それが移動したくなるということにつながると思う。全体的に、純化とは逆のミクストユースを進めていくということが打ち出していけると良い」ではないか。

●次回開催について

(事務局)

- ・次回の第5回特別委員会は、今回参考資料として出した全体の暮らしのイメージを深めていくために、全体を総括する議論をお願いしたい。第1回～第4回の示唆を踏まえて議論したい。
- ・また、11月13日に都市計画審議会への報告を予定しているので、その確認もお願いしたい。
- ・第5回特別委員会は、10月9日(金)午後2時～4時に開催する。状況を見て、集合形式を考えている。
- ・第6回特別委員会の日時は今後調整したい。

以上